

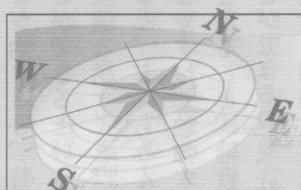
【管理職養成】

教頭実務

ガイダンス

No.179 かけがえのない存在⑧～言葉という媒体(対談)～

多久 知明・東京都新宿区立新宿西戸山中学校副校長
全国公立学校教頭会会長



前回人は、言われている内容によって傷つくのではなく、言われた表現によって傷つくのです」と臨床心理士に言われたことから私は、個々の人間の関係性において、その間に「空気と光」があることに気づきました。そのことをもう少し深める為に今回臨床心理士の鳥居優子先生とインターネットを通じて対談をする機会を得ました。

多久 本日はよろしくお願ひします。

鳥居 こちらこそよろしくお願ひします。

多久 まず、今回の対談は、前回のかけがえのない存在⑦に書いた内容を深めたいというのが意図です。前回の鳥居先生の「人は言われている内容によって傷つくのではなく、言われた表現によって傷つくのです」という言葉に触発され、自分なりにいろいろと考えてみたんです。そしたら「空気と光」という媒体の存在に気が付いたんです。

鳥居 とても面白い切り口ですね。光は主に視覚に関連していて、空気というのは、主に聴覚に関連するという風におっしゃったけれども、聴覚と限定してしまわない方が良いと思います。というのは、視覚と聴覚と同じくらいのレベルでとても重要なものが、肌感覚なんですね。

多久 それは、しいて言えば触覚ですか？

鳥居 肌で感じるもの。それは、最近の研究で言われるハイレゾっていうことがうまく表していますね。

多久 ハイレゾってハイレゾリユーションの略ですね。とてもリアルな音の音源の事ですね。

鳥居 そうです。そのハイレゾは、聴覚ではなく肌で感じているのだということが最新の研究で分かっています。だから光は視覚

という結びつきで良いけれど、空気は、聴覚だけではなく、肌で感じるということも考慮して考えると、この対談がより深まると思うんですよ。

多久 なるほど、とても興味深いですね。実は、それに係わる話を聞いたことがあるのですよ。それは、アフリカのセレンゲティというサバンナでの話ですが、ゾウが1頭出てきて、そのゾウの映像をNHK取材班が撮影していたら、そのゾウは、鳴きもしないのにどこからかゾウの集団が出現し取材班をぐるりと取り囲んでしまった。ゾウは、ライオンよりも怖い動物だって言われていますから、すごい恐怖だったでしょうね。しかし、そこで取材班は、奇妙なことに気が付くんです。どのようにしてそのゾウは、仲間を呼んだのか？

鳥居 もしかして、人に聞こえない声をだしていたとか？

多久 そうなんです。人間の聴覚には、聞こえない、ごく低周波、とても低い周波でゾウが助けを呼んでいたことが分かったのです。

鳥居 実は、ゾウが鳴いていた。

多久 そう、低周波を使ったコミュニケーションをゾウが使っていたということなんです。人間も聞こえないけど感じる、見えなけれど見えているって感覚があるんですね。

鳥居 それが研究で肌で感じている、感受している、ということが分かってきたんですね。で、この頃、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策で私もズームとかスカイプでセッションをやるんですけど、主に視覚と聴覚だけに頼ることになるんですね。

多久 空気が伝わってない。
鳥居 そうすると情報は、欠落しているわけで、その中でクライアントが発しているものを一生懸命探ろうとするから、すごく疲れるんです。

多久 その要素が欠落しているところがかなりストレスになるといえますね。昔、アナログのレコード盤からCDに代わるとき、何故か20kヘルツ以上の音の成分をカットしたから、音に暖かみがなくなつたと言われたんですね。まあその帯域は、人間の耳に聞こえないから良しとされたんですが、実は、無意識の領域で聴いていたことですかね。鳥居先生風に言うなら肌で聴いてたと。

鳥居 アンコンシヤスですね。心理学で言うと、意識っていうのは、海面から出た氷山の一角で、そのほとんどが海の下にあるんですね。無意識としてね。それで、人はその海面下の無意識の領域から大きな影響を受けているんです。そこで、その無意識に働きかけるのが心理療法なんです。

多久 心理療法は、一般的には一対一ですよ。教育の現場では、一対多ですよ。そのような中で、よりリラックスして授業ができたならば、生徒の思考の深化も図られると思うのですが、どうでしょうか？

鳥居 教える側の先生がオープンマインドでリラックスしていることは、基本として大事ですね。無意識で教師と生徒がシンクロするので先生の心の状態がとても重要なんです。

多久 まず先生方がリラックスして授業をすることが重要。当たり前のようですが、

実は、ここがあまりよくできていない。先生が忙しすぎてセンサーが鈍ってしまい生徒の状態を見落としてしまいがちなんですよ。
鳥居 そのセンサーについてですが、そのセンサーを研ぎ澄ますことは、とても大切です。オープンマインドでリラックスは基本として、それプラス、先生方にとっては必要不可欠ですね。アンテナを立てる感じですよ。

多久 先生方は、発信するのはとてもまいんどだけど、受けるのは下手な人が多い。

鳥居 なるほど。

多久 で、どうやってら受けるのがうまくなるのか？ それは、まずしゃべらずに聞くことですかね？

鳥居 門構えの聞くと部首が耳への聴くは違いますね。聴くの方ですね。

多久 まず、聴いてから話せばいいじゃない？って思うんですよ。生徒が質問しても、話を半分聞いて、回答しちゃうとか、否定しちゃうとか(笑)。で、子どもは、もう質問するのは嫌になっちゃう。例えば、学校のルールとかで、生徒がなぜそうなんですかと、質問してきても、それはルールだからと、聴こうともしない姿勢ですね。

鳥居 言葉を聞くだけじゃなくて、その子がどんな表情でどんな声でどんな態度でその言葉を発しているのかを聴かないとそれに対して正しい対応はできないんですよ。
多久 それって今鳥居さんが言ったことは、空気と光を使って聴くということですよ。
鳥居 そう、空気と光を聴かないと。

今回ほんの短い時間でしたが、臨床心理士の鳥居優子先生にお話を伺いました。その中で特に気が付いたポイントは、①人は、

肌で音を聴いている。②無意識の領域で聴いている。③発信も良いが受信のセンサーの感度を研ぎ澄ます。以上の3点がわかりました。教育の現場は、現在、働き方改革が進んでいます。これは、先の対談の中にあつたように先生方が健康で子どもに向かうということは、学校の中の仕事をうまく配分する必要があるということ。しかし、それには、システム自体をきちんと考え直すことが必要です。

新型コロナウイルスの感染拡大により、学校は2カ月半もの間、臨時休業になりました。教職員も8割を在宅勤務させるなど工夫をしながら対応してきました。まずは、命が大切ですから。この頃、少し感染の度合いが減少し、学校生活を元に戻すには、どうしたら良いだろうという議論が飛び交っています。「元に戻すため？」私はこの言葉に疑問を持ちます。そんなに良い過去だったんでしょか？ そんなことはなかつたはずですよ。「だったら新しく構築しましょう」と言いたいのです。学校の中を学校の環境を人と人の関係性を。決して過去に戻ることではできません。しかし、必ず未来が現実として現れます。私たちは未来を構築する創造性を持っているんです。

今回、空気と光ということを臨床心理士の鳥居優子先生を交えて、対談してみました。私が、私自身がとても学びましたし、また自己の内部の思考をうまく引き出しもらえたことに感謝いたします。さすが臨床心理士だなと感心いたしました。うまい具合に私の無意識の領域を引き出し、最後に空気と光のところに結び付けてくれました。本当にありがとうございます。